

菅家寔錄

松

377

庫	文	閣	内
五五	三〇	三九	和
函	冊	號	書
二〇	架	類	津
冊		三	共

	二五	和
	〇六	書
	一九	門
	三九	
三	三	類
冊	架	函

内閣文庫	
番號	和 25069
冊數	3 (1)
函號	155 377

155-377



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

律

夫者家夏録の松本愚山

先生子に古くは家也に病なり

家々に番氏子餘商を由り

遊下序文此書也世の如し

まの記文書人しは世の如し

方留々い遇山先生六儒字

以業心して常に

先神尊公の高徳を慕ふ

ひらめきしるも有る事

おもひあきぬく世は久し

あきむしあかしく思ふ程に

松竹梅の三を定るや三人

をきかんとふ三巻は名

うしうの編ふ文巻つ

いふやうに書かた久し

昔に遺る事奉り
孫に及ぶ事奉り

寛政十戌午歲冬十月

勅解由長女為らむ謹志奉る



菅家定録松集目錄

凡例

御神像

御年譜

御系圖

野見の字稱の事附す海に於て好む事ふと師の姓は

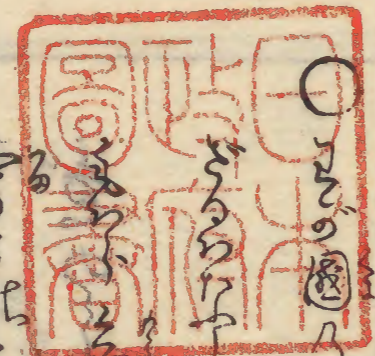
ふらふ事

菅原の姓に及ぶ事奉る人の事奉る事奉るに及ぶ

河原の事奉る事奉る事

○ 清之郷の事系法華集文章巻之抄
 ○ 是言卿の事附之雅寺の之記法華希之菅原の院
 ○ 如梅敏乃書師

○ 清之郷の事系法華集文章巻之抄
 ○ 是言卿の事附之雅寺の之記法華希之菅原の院
 ○ 如梅敏乃書師



凡例

○ 清之郷の事系法華集文章巻之抄
 ○ 是言卿の事附之雅寺の之記法華希之菅原の院
 ○ 如梅敏乃書師



俊德赫烈補袞聖明材稱周幹
 訶賡虞廷乃遭不祥貝錦以成
 忠精動天天其助誠維文維績
 百世無差煥為斐為掄如春華
 寵賜是膺祀典是嘉神明四施
 厥格弗遐

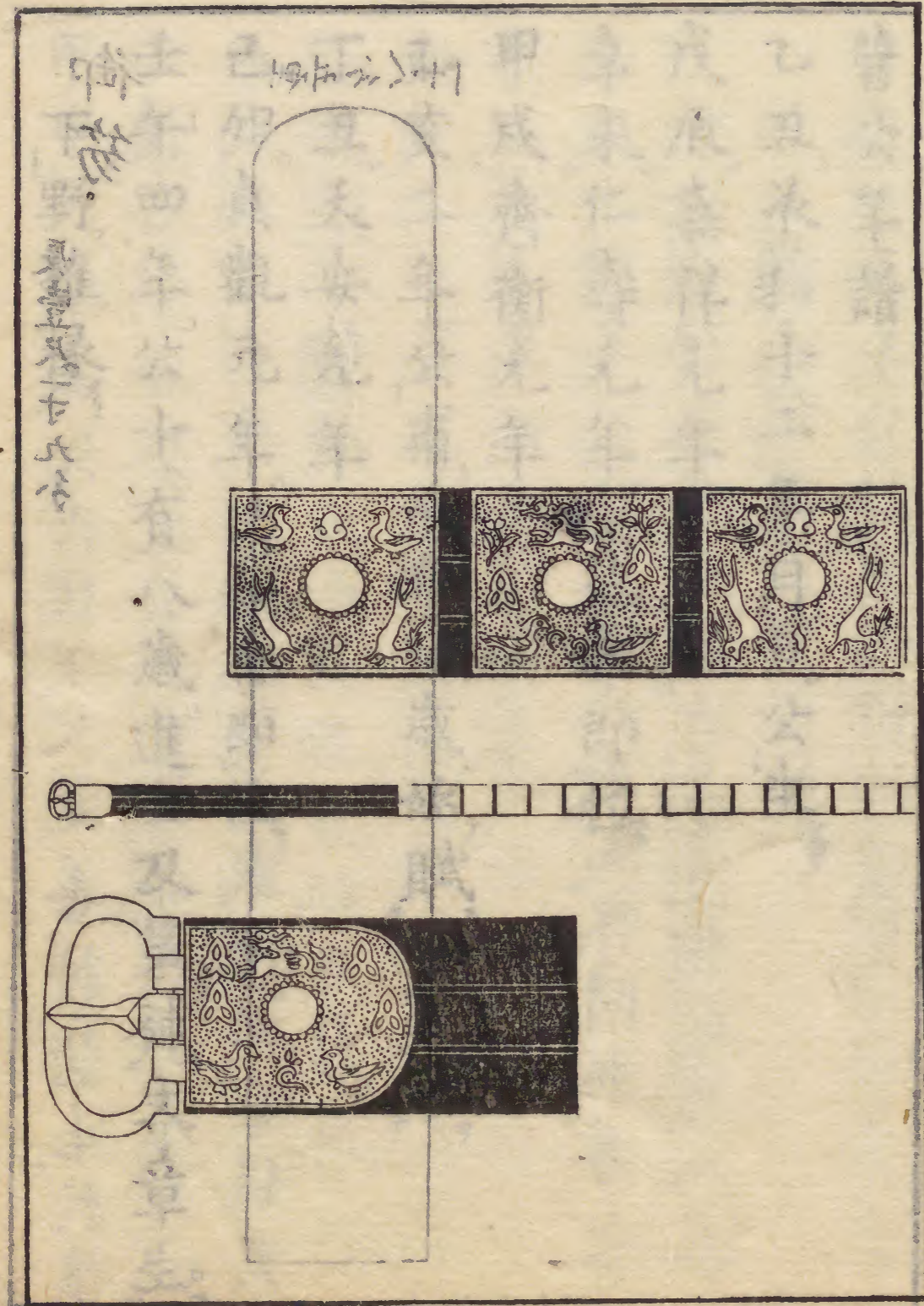
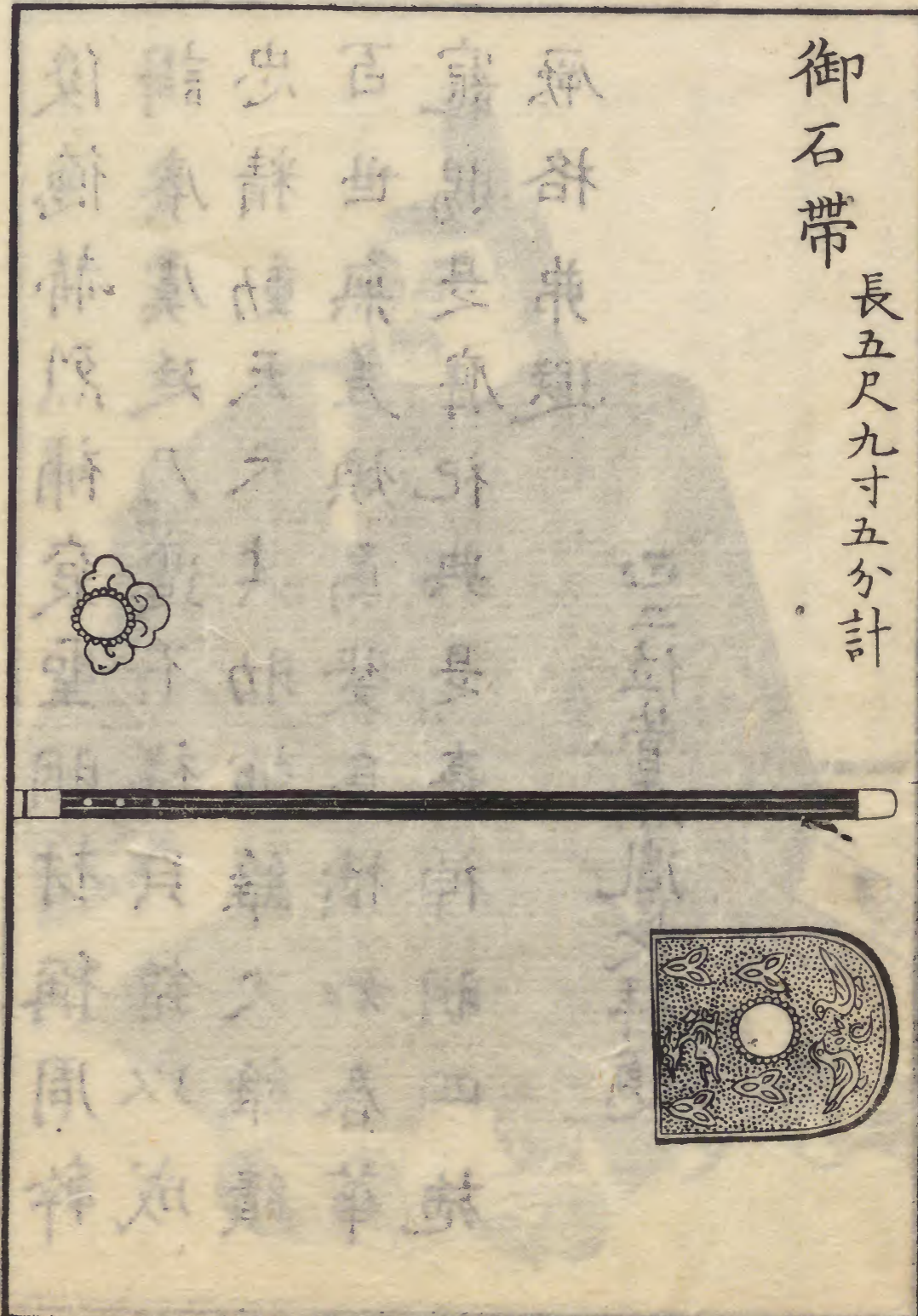
正二位菅原胤長拜題

菅原胤長

身正又次古公孫

御石帶

長五尺九寸五分計

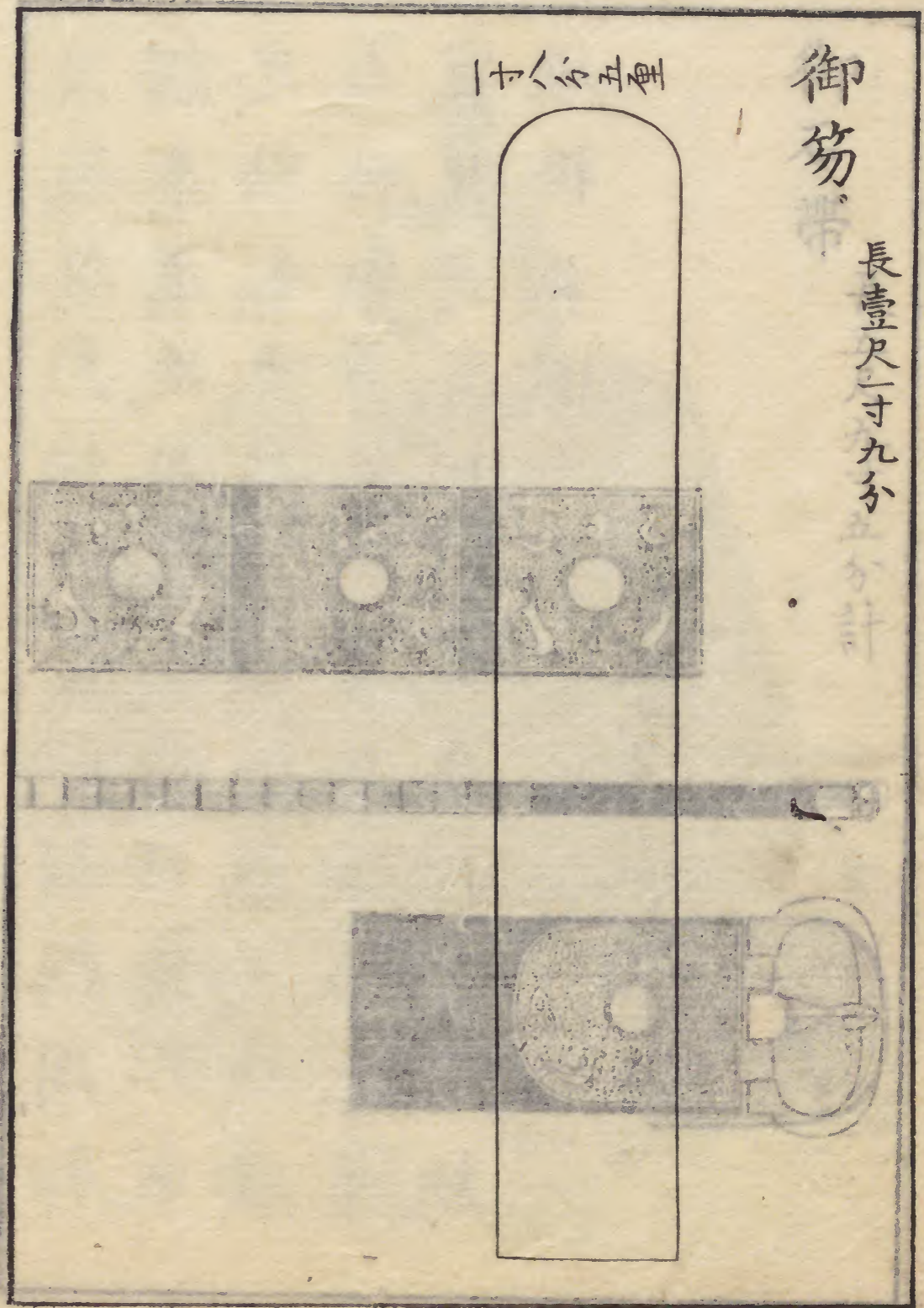


御石帶
長五尺九寸五分計

御笏

長壹尺一寸九分

十一分五厘



管公年譜

乙丑。承和十二年。月日。公生。

戊辰。嘉祥元年。

辛未。仁壽元年。文德帝即位。

甲戌。齊衡元年。

乙亥。二年。公甫十歲。始賦五言詩。

丁丑。天安元年。

己卯。貞觀元年。清和帝即位。

壬午。四年。公十有八歲。進士及第。補文章生。

甲下野。權掾。

甲申六年。叙從六位下。父是善授諸生於後
王漢書畢各詠史公得黃憲作詩并序
丙戌九年。公侍內宴賦詩是歲補文章得業
下生進玄蕃助。

庚寅十二年。正六位上
辛卯十三年。任少內記。

壬辰十四年。公二十有八歲。為存問渤海客
大使會母伴氏卒。停職五月。奪情起復。任兵
部少輔。亡何遷民部少輔。

癸巳十五年。公赴越州祈神禳災。

丁酉元慶元年。陽成帝即位。公三十四歲。為

式部少輔。文章博士。

戊戌二年。文德實錄成。代藤原基經作序。

己亥三年。授從五位下。

辛丑五年。五月。父是善薨。

壬寅六年。正月。兼加賀權守。

癸卯七年。月。渤海國使裴頌來聘。推行

治部太輔。事與頌倡和。

甲辰八年。上太政大臣職。掌有無。并史傳之

中相當何職疑議。

乙巳。仁和元年。光孝帝即位。

丙午。二年。公四十二歲。罷式部少輔。文章博士。二官。貶讚岐守。赴任本州。

丁未。三年。入朝。出使。未報。辭行。

戊申。四年。宇多帝即位。授正五位下。復赴讚岐。是歲旱。祈雨。城山神立雨。

己酉。寬平元年。出使。未報。辭行。

庚戌。二年。秩滿歸京師。乃聽昇殿。

辛亥。三年。再任式部少輔。左中辨。尋補藏人頭。屢上表辭職。不許。或曰田口達音卒。

壬子。四年。授從四位下。兼左京大夫。奉勅脩類聚國史二百卷。出使。未報。辭行。

癸丑。五年。累遷參議。左大辨。兼勘解由長官。春宮亮。不果。

甲寅。六年。公五十歲。門生設宴。頌壽。帝竊遣人賜文資金。是歲充遣唐大使。會唐室衰亂。不果。

乙卯。七年。拜中納言。兼近江守。遷春宮大夫。侍從。前是公侍東宮。試一時十首詩。至此再應皇太子令試。一時二十首詩。是歲。勅。

丙辰。八年。出使。未報。辭行。

丁巳。九年。出使。未報。辭行。

戊午。十年。出使。未報。辭行。

己未。十一年。出使。未報。辭行。

庚申。十二年。出使。未報。辭行。

辛酉。十三年。出使。未報。辭行。

壬戌。十四年。出使。未報。辭行。

癸亥。十五年。出使。未報。辭行。

甲子。十六年。出使。未報。辭行。

乙丑。十七年。出使。未報。辭行。

丙寅。十八年。出使。未報。辭行。

丁卯。十九年。出使。未報。辭行。

戊辰。二十年。出使。未報。辭行。

己巳。二十一年。出使。未報。辭行。

海國使裴頌復來聘。公奉勅與紀長谷
雄往鴻臚館倡和。
丁巳九年。遷推大納言兼右近衛大將氏長
者。

戊午昌泰元年。醍醐帝即位。賜內覽宣旨。
己未二年。公五十五歲。陞右大臣。屢上表辭
職。優詔不允。

庚申三年。獻家集二十八卷。
辛酉延喜元年。正月。俄貶太宰權帥。尋赴
府。

(八)

癸亥三年。二月廿五日。公薨于府。實五十九歲。
越幾日。禮葬安樂寺。
距今寬政十年戊午
九百九十有八年

菅家御系圖

公諱某贈正一位大政大臣

高視

右大辨
從五位上

雅規

山城守
從四位上

資忠

右大辨
從四位上

孝標

上總介
從四位上

定義

大學頭
從四位上
贈從一位

是綱

大學頭
正四位下

宣忠

治部推少輔
從五位下

長守

大藏卿
從四位上

為長

參議大藏卿
正二位

長成

參議正二位
氏長者
高辻家

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including names and dates.]

在良

式部大輔從四位上贈從三位
唐橋家 高辻大學頭是綱朝臣弟

高長

參議式部大輔從二位
五條家 高辻參議為長卿次男

茂長

治部卿正三位
東坊城家 五條參議長經卿次男

長時

參議式部權大輔從二位
清岡家 五條權大納言為庸卿三男

長義

權中納言正二位
桑原家 為庸卿四男

菅家宣錄松集

○野見の宿禰乃事付すむらび乃好乃并土師の姓玉

神宮の國に在りて其の好乃天照大神の御子天の穗日命
神宮の國に在りて其の好乃天照大神の御子天の穗日命
照命を以て其の父子と云ふ云の國に天降りて其の好乃
天の國に在りて其の好乃神宮と神宮の神宮を以て其の
其十二世の孫と鷹濱淳命と云ふ其の好乃其人磯城瑞籬の宮天
が下より其の好乃神代は其の好乃其の好乃其の好乃其の好乃
其の好乃其の好乃其の好乃其の好乃其の好乃其の好乃其の好乃

今按天孫日向の國高天原乃事とる皇降臨すゆん
ん天孫日向の國高天原乃事とる皇降臨すゆん
ん天孫日向の國高天原乃事とる皇降臨すゆん
ん天孫日向の國高天原乃事とる皇降臨すゆん
ん天孫日向の國高天原乃事とる皇降臨すゆん
ん天孫日向の國高天原乃事とる皇降臨すゆん
ん天孫日向の國高天原乃事とる皇降臨すゆん
ん天孫日向の國高天原乃事とる皇降臨すゆん
ん天孫日向の國高天原乃事とる皇降臨すゆん
ん天孫日向の國高天原乃事とる皇降臨すゆん

傳ふふべしにふとすくくはるん

鷺濡淳命の弟と甘美乾飯根命と人其の事と野見の宿
稱とさる人天性勇氣ありて力量人さる事と野見の宿
城の宮乃朝廷よ仕奉る事と野見の宿
事と野見の宿
野見の宿
野見の宿
野見の宿
野見の宿
野見の宿
野見の宿
野見の宿
野見の宿



世民とともふ事なりし定めしりしとては其績よ
ありし向の地とありし土師の戦は仕一姓と改く土師の
陸とめさるるの後に帝と菅原伏見の里よ葬り奉る
やるとして土師氏代々相伝ぎく喪葬の事承ふく日本
書紀よ志ふせり

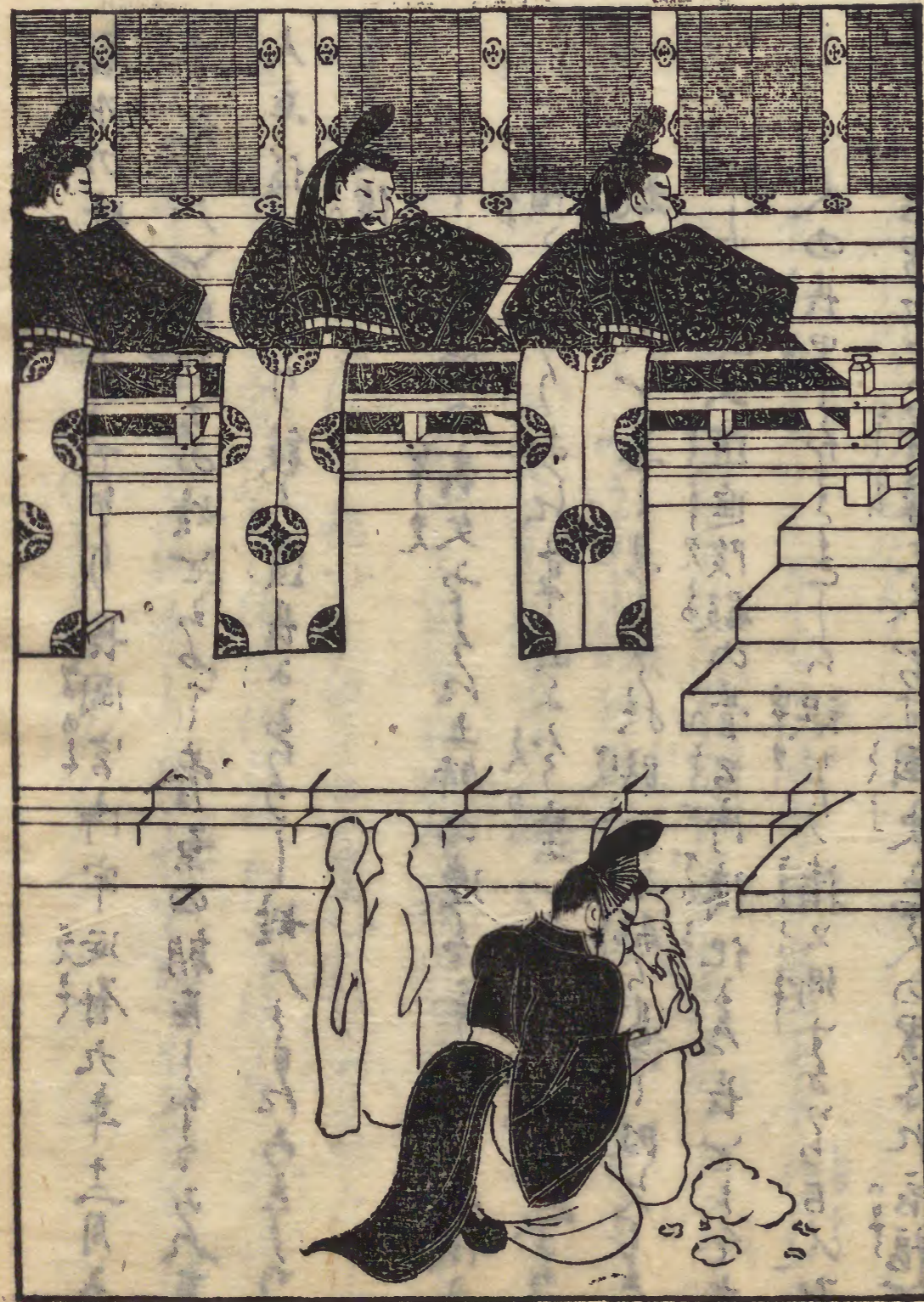
今按孔子のより備と作るも乃の後世の人とては
所見のよりぬ植物作りく殉葬と止し事莫大の功
徳なり先儒もこれと仁者の勇とて下し論が松の
竹とて姓多縁の今と連綿しとて事天の報應
とてあらん事とて下しとて世も猶古を凌墓と墳墓

大和國顯宗帝のは又攝摩國

伊奈郡のはもとともを

み所この上

中よりほりおとれ向はよりせよ異邦のものせは何の
用とて知らざるもこれ多しとて世に神代の實
とてあらん非ん皆建物の事とていひしりし
しりしは謂明器とていひしりし
み按とらん野見ゆりし土師の姓とていひしりし
重臣たりし姓氏縁よお重長天のひかり命
の後なりし記とていひしりし土師の尸とていひし
陸とめさるる野見ゆりしとていひしりし事一代
よかされふ事とていひしりし事とていひしりし



居所の地名よりなりてなり長岡宮御宇延暦九年十二月
す祿の尸と改朝臣の姓とありて菅原の朝臣とありて古
人卒後其子より族人道長よりなりて姓尸とありてあり
と云連綿なり

々按其時の表文よりなりて土師の連とありてありて
預る尸よりありてありて今案と加下とありてあり
扱よりなりて思ひ見ると其賤役とありてありて改
しとありて二道遙院殿の菅原清傳記より長とありて古
人の長男とありてありて誤り清の郷すかりて古人
長男にて弟達三人ありて國史より人の男に云根と

よりなりて即ちなり

遠江守菅原の古人よりなりて阿波守宇庭の子を儒者の
世に世にありて其人よりなりて世俗に奇も合事と好ま
るる事よりありて後家より餘財ありて諸子寒苦に
通るるのいづれ國史より其傳ありて詳しき事なり
し事目とありて世に又延有るは侍読の勢と貴しき
る甲よりありて其類よりありて其業とありてあり
かど清の御家よりありて振ひにありて後三任より昇進せ
らるるに博士の家より朝廷より學科とありてありて
始する由より御補任よりあり

と後古人かく学術乃後長びる能くは徳行乃懿
美い事なれ家能貧しく諸子の貴くをそへり家
り志るより昔ある舊系と考うに野見の官符の
殉葬と歩く仁徳と施せしより以陣累世其の
了子孫任槐より外進しありのに因に積善の餘
慶より後一叔古人の官國史をそへにけり
ふちに轉せし事ハ延暦四年能勅し由又侍読
に百もさし事も侍読の勞と責しよりわき
事ハゆかり又古人乃卒せし事ハ尊卑を
弘仁十年卒すよき卒すや載る後日本紀

延暦四年能下は故遠にさるる古人しわれハ時
すに卒せし事ハ其卒年の延暦元年
より三年卒し能中ハ何より
冬議後三位音人卿し今ハ備中ハ大枝の本生能子し
そえ同ハ野見官符より又土師しと大枝の改めし
時ハ當りて大枝と改て大江朝臣し能事とやがてわれと
許る貞觀八年ののりハ郷若原の是善郷と師し
事ハ博士ハ聞しわれハ事しとてし能貞觀格式と
後ハ大學寮ハ東西に曹司しりて能生と教等ハ是實息
大枝の二家も長し是より若江ハ希ハ稱て文學の宗通

儒雅能師哲母二家も過るるなり

今按に江家文學能起りて世御と始りて一を家と
起りて名儀も昇進しあひて中誠の規模のよきと

一菅江能二家第一稱すといふも其源と尋ねれ
ば師弟能契ありとれば後本按中納言區房卿を宰

能帥を任されし日も天祥と崇祀するもいふを
これゆゑなりとす

○菅原清之卿の事 其文章秀麗清重集に
撰りて一車

後三位菅原清之卿と稱冠り經更なりなり延暦年

中み文章生ん補せらるる中遺唐使の判官となりて入唐し歸

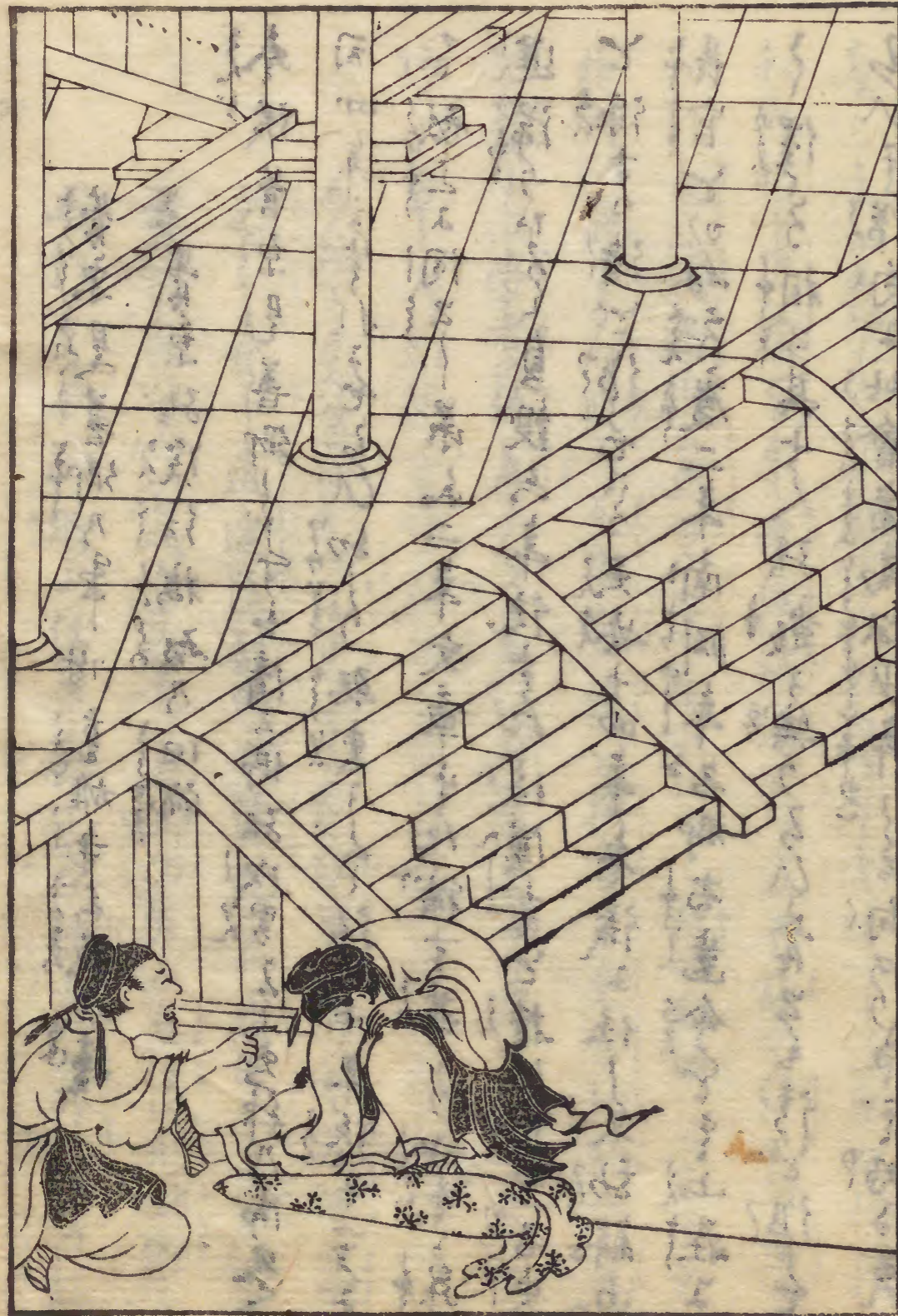
朝のら叙爵すは仁年中に詔ありて天下の男女の言版皆をら

り能と後とて五位に能位記もわたりて能文用ひらるるを
皆み純卿の何れなりとて其功少の代又清忠の夏

野と令能義解と傳りて奏進せし能兼和六年後三位叙
し牛馬のり南進し到る事とゆふは日く九年豊

るひめすすなりとゆふ一みみ御凌を集文章秀麗の二書と
撰述しるるも世に傳り侍りて文集六卷有る也

今按貝原氏の説も能御座より昭朝の後世に三位り
進りて記せる誤なり 又の御是吾卿もその大學の任せし
日も記されし日本史の記するなり

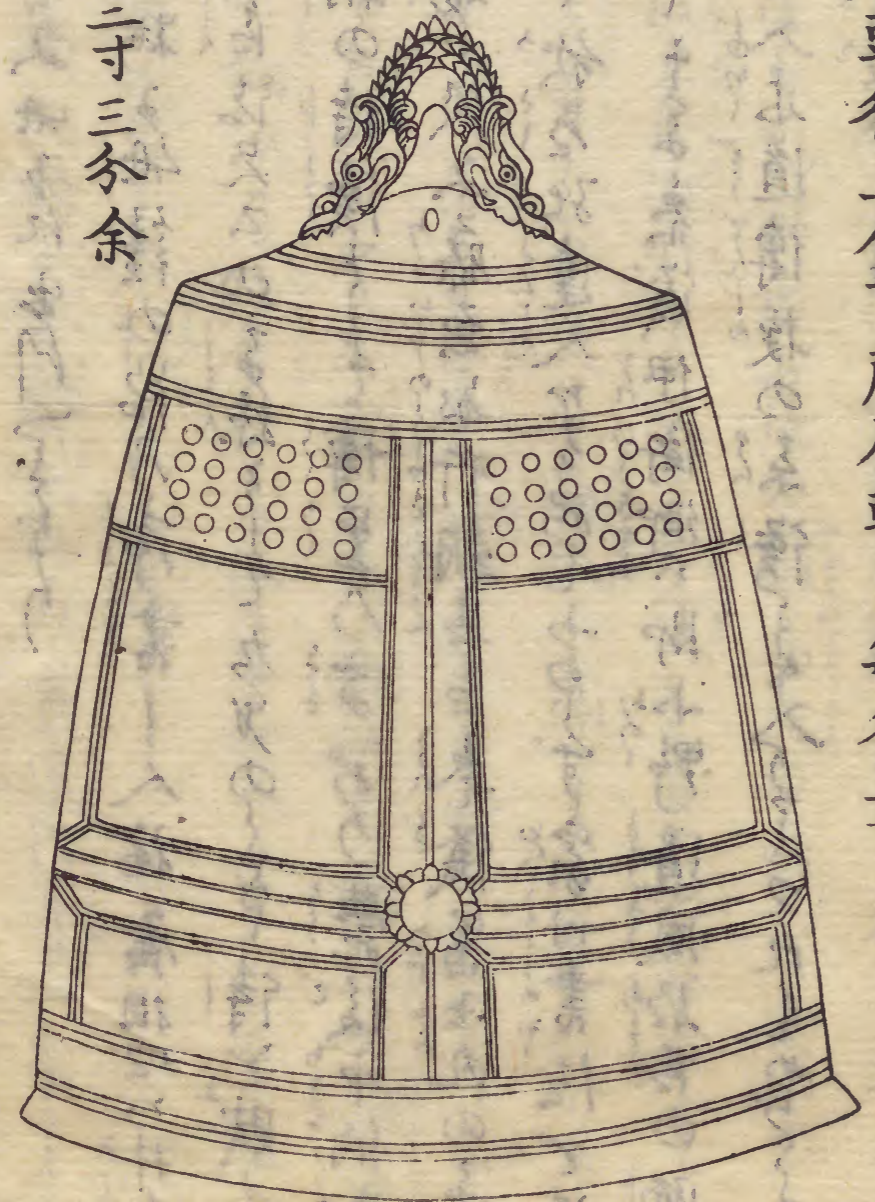


又神漢寺鐘銘より其勅解由長官式部大輔指
鷹槍守より其國史より伴塚守又其近江守
任ずとも其指塚守に任す事あり其
金石の銘の歴史に文と符合せざる其例多
し又後漢書と漢書と其是若し其書に
ふれば日本史に後漢書と書る所の傳の
せましの誤りあり又其國史の傳乃題
よ其國史の書と書る所の相違あり
なり其國史の傳に刻記を故重書に務
む又其知望脚金之假取感塚と其器なり

何と云く其父師の侍り授受し其事なり
北山雄の神漢寺より其三絶鐘と其傳に
て其銘を其國史に傳せり序に右左并掲廣相作
る書に左兵衛督藤原行朝長と其筆せり其吾國
よ金石の銘其世の事なり其多賀城の碑の
其如の者より其條を文筆に傳せり其
其跡に詳なり其考へ其或を風取し其
其如の跡に其完く其類に其金に其
其如の者より其序者作者筆志より其
其如の者より其序者作者筆志より其

愛當之山神護之寺三寶既備六度無虧唯所有梵
 鐘形小音窄故禪林寺少僧都真紹和尚始發弘願
 有心改鑄銘範未成衣祴早化檀越少納言從五位
 上和氣朝臣彛範悼和尚之遺志尋先祖之舊蹤以
 貞觀十七年八月廿三日雇冶工志我部海繼以銅
 一千五百斤令鑄成焉恐年代久遠後人不知仍聊
 記於鐘側右少辨橘朝臣廣相之詞 銘一首八韻
 傳音在器 證果惟日 尔祖初業 厥孫聿遵
 宿昔三尺 今日千斤 體有寬窄 功無舊新
 山聲萬歲 谷響由旬 聞宜覺夢 和即歸真
 慈周世界 感及非人 雕琢勝趣 蒙叟當仁
 參議正四位下勘解由長官兼式部大輔播磨權守菅原朝臣是善銘

圖書頭從五位下藤原朝臣敏行書



高四尺三寸三分余

天長十一年八月廿三日

川く〜ゆる〜も形なり道澄寺の隆乃紹乃〜
〜の〜又世下ん出川〜

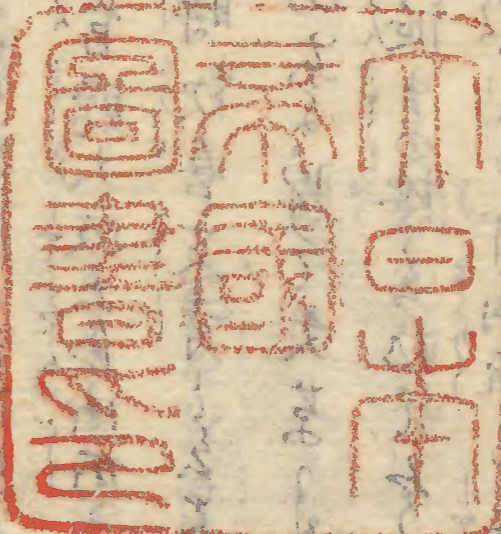
々梅々世隆の紹乃序書一人指廣相心井手左
大臣徳見云の〜源〜九乃の〜侍と賦〜累
朝の侍續〜博學乃〜あり薨後中納〜と
賜〜入藤急敏行朝臣と冬儀富士丸の子〜
〜歎及死達人〜あらず家世書法と傳〜
〜そま系派伊衛卿〜即小野道風於臣の跡〜
〜入本道傳授の系傳〜入〜んも〜
書家〜

又世卿の位〜と菅原乃復〜一拾芥抄ある
よ菅原復と勅解由少治の南島丸の西き丁にありと
菅原大政大臣御所〜或る冬儀是昔の家なりとも
時欽喜寺と〜又紅梅殿〜聞下〜山の小而復
の亦〜文草〜宣風坊と書ら〜所なり天祥の
誕生の地〜今も菅大臣〜びて御社と勅信あり
菅家の御嫡流乃好号と〜せら〜の菅原氏に
是善心乃家と〜説是〜道〜

々梅々世隆の紹乃序書一人指廣相心井手左
大臣徳見云の〜源〜九乃の〜侍と賦〜累
朝の侍續〜博學乃〜あり薨後中納〜と
賜〜入藤急敏行朝臣と冬儀富士丸の子〜
〜歎及死達人〜あらず家世書法と傳〜
〜そま系派伊衛卿〜即小野道風於臣の跡〜
〜入本道傳授の系傳〜入〜んも〜
書家〜

10

菅家寔録松集



一 株梅東を數歩有數竿竹每至花時每當風
便可以優暢情性可以長養精神

[Faint handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side]

5



